

製品名: ATP5C1 ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab07326**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、マウス、ラット
標識	非共役
修飾	未修正
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:20000-1:40000
分子量	33kDa

抗原情報

遺伝子名	ATP5C1
別名	ATP5C1; ATP5C; ATP5CL1; ATP synthase subunit gamma; mitochondrial; F-ATPase gamma subunit
遺伝子 ID	509.0
SwissProt ID	P36542
免疫原	抗血清はヒト ATP5C1 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 131-180

背景

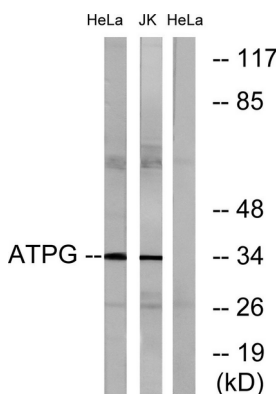
この遺伝子は、ミトコンドリア ATP 合成酵素のサブユニットをコードします。ミトコンドリア ATP 合成酵素は、酸化的リン酸化反応

中に内膜を横切る電気化学的プロトン勾配を利用して ATP 合成を触媒します。ATP 合成酵素は、可溶性触媒コアである F1 と、プロトンチャンネルを構成する膜貫通成分である Fo という、2つの連結した多サブユニット複合体で構成されています。ミトコンドリア ATP 合成酵素の触媒部分は、5つの異なるサブユニット (α 、 β 、 γ 、 δ 、 ϵ) で構成され、 α サブユニット 3 個、 β サブユニット 3 個、および他の 3 つのサブユニットを代表する 1 個という化学量論で組み立てられています。プロトンチャンネルは 3 つの主要なサブユニット (a、b、c) で構成されています。この遺伝子は、触媒コアの γ サブユニットをコードします。異なるアイソフォームをコードする選択的スプライシング転写バリエーションが同定されています。この遺伝子には機能に関する擬似遺伝子もあります:ミトコンドリア膜 ATP 合成酵素 (F(1)F(0) ATP 合成酵素または複合体 V) は、呼吸鎖の電子伝達複合体によって生成される膜を横切るプロトン勾配の存在下で、ADP から ATP を生成します。F 型 ATPase は、膜外触媒コアを含む F(1)と、膜プロトンチャンネルを含む F(0)の 2 つの構造ドメインで構成され、中心茎と周辺茎で結合しています。触媒作用の間、F(1)の触媒ドメインでの ATP 合成は、中心茎サブユニットの回転機構を介してプロトンの移動と結合しています。複合体 F(1)ドメインの一部と、複合体回転要素の一部である中心茎。ガンマサブユニットは、アルファ(3)ベータ(3)で形成された触媒ドメインに突出しています。中央の茎が周囲の $\alpha(3)\beta(3)$ サブユニットに対して回転することで、 β サブユニット上の 3 つの独立した触媒部位で ATP が加水分解されます。機能:膜を挟んだプロトン勾配の存在下で、ADP から ATP を生成します。ガンマ鎖は、ATPase 活性と CF(0)複合体を通るプロトンの流れの調節に重要な役割を担っていると考えられています。類似性:ATPase ガンマ鎖ファミリーに属します。サブユニット:F 型 ATPase は、触媒コアである CF(1)と膜プロトンチャンネルである CF(0)の 2 つの構成要素から構成されています。CF(1)には、 $\alpha(3)$ 、 $\beta(3)$ 、 $\gamma(1)$ 、 $\delta(1)$ 、 $\epsilon(1)$ の 5 つのサブユニットがあります。CF(0)は、a、b、c の 3 つの主要なサブユニットから構成されています。組織特異性:アイソフォーム H は、急速なエネルギー供給を必要とする心臓と骨格筋に特異的に発現します。アイソフォーム L 型は、脳、肝臓、腎臓に発現します。両型とも、皮膚、腸、胃、大動脈に発現します。

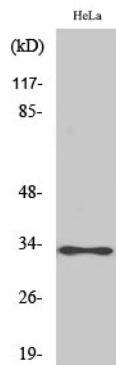
研究分野

酸化リン酸化、アルツハイマー病、パーキンソン病、ハンチントン病、

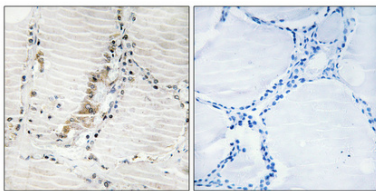
画像データ



HeLa 細胞および Jurkat 細胞のライセートを ATPG 抗体を用いてウェスタンブロット解析した。右レーンには合成ペプチドでブロッキングされている。



ATP5C1 ポリクローナル抗体を用いた様々な細胞のウェスタンブロット解析



パラフィン包埋ヒト甲状腺の免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4℃、一晩) に希釈した。抗原賦活化には、高圧高温トリス EDTA (pH8.0) を用いた。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。